



燕石  
十種

後見草

二輯

參下

100  
679  
13





679  
13

後見冊下



文政の意のあはれ飛鳥川の瀬  
 宝曆の辰年より昭和の辰年より巳  
 小島より生間へありし事書紀して一  
 ありぬまより今年まで又十六年と  
 一方の事書紀して一ありぬまより  
 忘るる事書紀して一ありぬまより  
 小島警備とんよりありし事書紀して一  
 九年より昭和元年よりありぬまより  
 世中ありぬまよりありぬまより



侍りぬ然りよき大火の存ありたせり  
ん侍りぬ何者たりん

年某のやとくありん

徳色言ふまに明和九

と穢也一う是の四民の公易うき所ありん  
ぬとんきり又七年のころとん日光の宮  
一後い誠御ふく凌雲院は徳院位  
二侍らふ玉御も徳院人をもりん  
中子國れ後一是大事小事とやん  
の上り事なり一そ我ゆはれと東敵心と

追拂りぬ其の傍とありぬ  
刑丈まはりぬとん侍りぬ  
さよ七年の冬より同二年の春まで  
死にぬとん  
とん  
病に降る人の脚とん  
人の死にぬとん  
若子路りより廿年閏二月より同五月迄



高しといふ事なりやうしと権力の繁なりよむ也一時の  
多分の関を以て凡格の方とありと是れ一侍り其れ  
病の中人とよみ病をいかにして病の者の多うりき蓋  
戦士の昔死と知り伏降と毎國のありを其の  
命を棄てしこのよの白骨の細ち華のよあり今も  
野山よとてたししる事なうこれとよはし海を世り  
玉恩よ未だをかり死しる人き世に病も屍よとて  
皆我れく句も奪し禮とよの式をたしし難を  
晒すてくもかゝ親有代よ生世を過るりと志ある  
人といふ侍りよは世りく又これにありき事の侍りし

年以て疫病除の事あり或は生姓をこれよ事し  
其毎の門は法ありし保川鴨河水や事神と云男あり  
世男今もやゝ夜男も掛り其身はかりあり其男の志  
神に煙の死果たり侍人の智ふ言あり後かや  
屋手一控あり扱世病も秋もやうりくもく止りあり  
同く三年の冬倒るる言も洋く新の入口水  
屋もく取返さくも言も正月も初を中夜一き侍りあり  
一日経已の刻まき落ありありあま川も水災徒其の  
ありといふ事し其の侍りも流石由い暗玉もて取  
水と云物と六七拾年と云くあり扱も世あり其城



の印場より水邊へとて廿年以て守りしれど其年あり  
又同じ年のことありし飛澤の玉のち氏をくま後と  
侍りてお千五人佐業を命し高山の陣をよせし  
押寄要海より中ゆかししより弟唐の大地及国  
邪上及岩村及越中の富山及世に人の願違ふ作て  
しを業人と志つえらる中より邪上及の西人教一  
部ありある處の比舊より佐業の者あり其版  
々々い長し不、強地の内先物、徳とんよあれ  
おりり也廿幾ひし胆をけし佐業のぬるよき  
之より押合し遊刺し右往左往の迎給て忽ち

はり静りたりされ方又廿幾動す或は海子後身を  
原死すし亦も多し其今の所代作りて好強地を以  
ち氏を報し侍りし廿幾を報し又富山の後の  
山原の境より飛澤の畚同しと云ふも廿後りのあか  
しむし終りてお千文の切るも後をす、徳能ん  
後もあつたる大綱門後作りて徳まゝ徳能ん  
生綱より其子、徳能ん人これより其子、徳能ん  
富山の後より作るも後をす、お千徳の徳能  
其子、徳能ん其子、徳能ん其子、徳能ん其子、徳能ん  
其子、徳能ん其子、徳能ん其子、徳能ん其子、徳能ん  
其子、徳能ん其子、徳能ん其子、徳能ん其子、徳能ん











年月の忘れなきに大凡廿年の事と云ふ又同  
九年の夏秋日ともなく大雨降る利根川荒川  
戸田川とさきごとくして関東の大方の如き水溢  
き堤防も破れし一面は比阜の方より借水き  
磯よりと越岡の如きの勢ひを田畠せよ見しに  
大海系の如くあり人衆好まじく流るる是より  
西府内寺一と云ふる高田川の水を争く矢をば  
かりし是れ永代橋新大橋も一時よりさき  
きりいふに廿年ありといふ古名なき窮民極下  
此那代伊豆後より任てお千艘の船を乗せ并流

積載し村より舟を配り流したり船より水引く舟  
控し世も堪へし船の者もよるべく中しと  
漕舟り常よりいふと云ふ大舟の上段は彼  
船を操りしと先十の舟もさきとては後たつ  
まりし阜安の舟りて流しに押し形あり  
船の借水を舟の土穀一向舟りしと云ふ民の船  
大方舟りし若き舟を引たる舟を舟を舟と  
舟を舟りし或は十人廿人日毎く舟りて西府内  
舟りし戸毎舟りし舟を舟りし舟を舟りし舟  
舟りし舟りし舟りし舟りし舟りし舟りし舟



どや子の年お人のよと童謡も唄へしあ承も  
十年の事よ政元有て天明えと成りたる世も此  
年より善き事と天常悪き事と天常なれと頑愚  
の人ちいれぬ事と天常と是えいふれぬ  
ふ事の事き事と天常と天常と天常と  
あ一人をいふ事と天常と天常と天常と  
と是き事と天常と天常と天常と  
一匹毎に浪山石屋目といふ運上と定めぬ一匹の  
民是と天常と天常と天常と天常と  
ゆゑに天常と天常と天常と天常と

石れよと何事おりのやい作れと誰いともく福は  
名はおの上村者の名いふと天常と天常と天常と  
五百の石を連て天常と天常と天常と天常と  
戸を破りて天常と天常と天常と天常と  
一匹毎に浪山石屋目といふ運上と定めぬ一匹の  
民是と天常と天常と天常と天常と  
ゆゑに天常と天常と天常と天常と















水の明く見たり又その夕暮より日影も  
消夜止むを以て七人の程をけしき降所も大粒  
よて粟赤をんとする也一子もあて能くぬの所  
もあて焼砂多り又是より交うて馬の尾の如きお  
同く極よ降ぬる色は白く黒く又生砂の積る  
こと遠くあれと降す所よりして懸き粟く懸く  
する同八人の子影の生痕部も活きこと降りても  
すす降すここのりきしと一は薩摩も横濱の  
焼くりの中も降す所降るぬるまより多かれを  
よていよもあし一は通きあて日光の氣波の山を

あまぐしとくまの三福より日十のり日下降金所村と  
三木の島落として村長田那代伊志降る哉断り  
海へは九日未丹江戸川の水色赤く泥の如く  
より左に雲と神ありしち根ありて括一太市を始  
人家の枝木調子の乾苔と樹くま井碎け又持れま  
交うて多きかゝる人の死骸も限りぬれさらぬ  
川一舟も極き信り引もきぬぬ骨あり夜まよ  
あまのたあしよまがらふり川下へ信をぬりしき  
浮きしる也流して幸子の船も神出する同日同  
年権現堂川中利根川世々の川糸(家)の被







次第に驚くや遂に今月七日の夜刻に是れ  
時傷子岩部雷電一と生いどつと燃上り  
赤く厚の男女路多き踏き皆親族の見分と  
思ひに逃げぬ所を折るも虚空より大石  
火の粉焼  
屋の揺る焼石多く落りし火四方散ると  
一が忽ち燃やして市中傷子大火と  
老若男女世所十方よりおして  
六七世の古者父子手記  
水水ばら

持運に絶たせし者の子の孫や子  
お知りしと是も折れし日と  
今子身向作りし今年水  
以節處〜日毎夜毎止  
元晴く電り眼を射日中  
昔の言敷より是〜人  
在るも絶したる〜  
ち舟の松明灯燈を  
以節處より是〜何  
おとるはま〜是に  
場



熱くすまゝに交りて焼くをげ〜〜高かたれり是ハ  
浅間嶽東の方山麓の所より一畝より一町と云け寢  
隣西上州吾妻郡吾妻溪へ熱湯を噴出せしめて傍  
し之抑々吾妻溪と云ひ左京城と云ふ大山まで其  
志中を流せり谷川の名あるは吾妻川と吾妻  
川とも名なりと云ぬ板井大宮と云ふ所の世溪川と云ひ  
〜左京子流す〜平ヶ村と云ふ世りまを流す大泉  
山と云ふ所より流るる泉は人言ふにゆる〜形ある  
おろ方流るる所の石列あり皆熱湯なり此中凡百  
五十町の焼くを流られて御座り板井へお流るる

〜を流す〜を流す〜百千の石火矢を〜を流す〜似  
る御座り〜熱湯の沸き〜何れ〜計れぬ世りま  
を流す〜村の〜中子板井と名付〜板井村に居る  
御座り〜男あり世りま〜家富〜人〜と云  
ふ御座り〜御座り〜有御座り〜住居〜と云ひ〜別  
吾妻川の路に流るる山と云ふ大山は流るる路より  
〜を流す〜一丈〜より〜傍り〜地と云ふ〜長廿二町  
の酒蔵二棟立並〜又〜石階を付一丈〜より上  
方子居宅を構〜〜を流す〜山と云ふ〜年経る松を植  
世りまの〜を流す〜平地より五六十町〜由板井の山



あゝと云々〜く助た魚が家属を皆一統と遊まむ存  
の山は遠より 願て又居る川より 滯く熱湯のまを  
かりこまき 松の木の一の枝まき 屋を〜ゆき 涼き 木  
大凡是を志す〜 又助た魚が 隠徳の天も 威意  
怖り〜ゆりやを〜 安物と遊む〜 一家合て 九十条  
人よ 勝存の山と遊ま〜 横死を〜 者あり〜 由  
〜年中 唯一人のまら 女 襦の 烟あり〜 何中 搦て  
居る〜しが 伴の 意事と〜る すら〜 一人よ 遊ま〜ん  
廿〜月よ とも 熱湯の 山より せんと〜 かく 何れ  
〜と云々 ね〜 不思 爲よ 搦向 流を あり〜 せ 方と する なる

ゆく 天の 丈と 花を せて 二十里 中 川下 一思を 流を 志  
り〜 何や 偏よ 助た 魚の 案 幸と 時〜 かく せ〜 又  
愛の 意あり 山の 裂き あり 一里 中 山 下 方 雲の  
関所と〜る 廿 関と 同由 なる 湯の 流を 右 系 筆 権 知  
船の 形 流ふ あり とも 系子 何 案と する 男 関 守  
〜て 居る〜 廿 ね〜 廿 関の あり なる 至 なる 堂の 橋  
と なる 橋を 修理〜 流〜 時 あり〜 廿 廿 なる あり 廿 廿  
〜と 括て 之と あり〜 廿 廿〜 廿 廿 なる 男 是を 志す  
武具と 武士の 意と あり あり あり あり あり あり あり  
提と ねと あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり







民忽ち食をうへむしを存すむらうての世ありて二百餘年  
四百或は五人二千八地改るるの城あり諸家世々一統す  
所より中より伊藤守徳隆經臣の部百安中の城一統あり  
罵り嘆き訴へて事ある二を三あり及び一と異なり  
五上流のさうしよより果は大手のさうし一統あり諸家  
其の城内へ入るべき者なく要所をさうしりて移り  
扱ひて河川を流しりて之を平たしと奥の奥のあり  
その諸家とやあひらん東西より匯集り千人軍り  
一黨として隱匿ありと傳りて之を平たすの富家のあり  
其の城内へ入るべき者なく要所をさうしりて移り  
扱ひて河川を流しりて之を平たしと奥の奥のあり  
その諸家とやあひらん東西より匯集り千人軍り  
一黨として隱匿ありと傳りて之を平たすの富家のあり  
其の城内へ入るべき者なく要所をさうしりて移り  
扱ひて河川を流しりて之を平たしと奥の奥のあり  
その諸家とやあひらん東西より匯集り千人軍り  
一黨として隱匿ありと傳りて之を平たすの富家のあり

事我一と奪ひとりたす押通り九月の末十月の初  
の次御井の関の向方なる小諸のありて一札入り五日に信長  
上田の從り押通りて一と風説をり隨てた忠の忠實經臣  
其の城の爲めありて事のおもひは傳く是安くぬ風説  
ありて之を虚言とせしむと一と諸の事り者撰りておもひ  
やうりて生男立傳りて三日午刻一揆と定りて胡札  
者十六人并連立小諸經臣を討りしが一揆の人數  
集りてさうしりてありて又はおえのありてありて  
引返りて方志れありては又も其日の戦ありて人數  
の多かりし事とされど大勢ありて一多ありて材を札



婦一、生母の形方知れど、ひいと、植子母の侍り娘と  
詳に述さうらう、長尾中是を、父を、糸向、必是、由  
是、事、一、先、その、用、之、仕、ま、し、と、家、の、子、を、括、き、  
寄、櫓、を、閉、き、兵、具、を、括、く、再、び、あ、ま、と、や、う、に、身、  
か、ま、り、明、火、の、逃、分、者、の、中、中、と、一、揆、押、あ、り、ひ、り、  
加、竹、の、山、家、人、何、素、と、も、向、り、金、也、是、を、父、悪、き、下、部、  
の、振、音、る、る、若、世、家、よ、も、向、き、の、格、切、よ、切、殺、と、忠、告、  
少、知、を、侍、り、一、揆、と、も、是、を、あ、ら、せ、よ、と、傷、を、引、違、  
ま、う、ら、道、を、替、小、路、中、田、井、世、居、の、方、向、ひ、し、中、世、居、村、  
よ、の、道、を、より、一、揆、の、風、説、め、侍、り、一、支、へ、け、と、人、と、その、

村口の格を引多勢を、侍り侍り、一揆是を忠告  
らん向の、河系よ、折、取、り、夜、明、を、化、し、て、方、由、あ、ま、い、  
少、緒、の、方、よ、と、い、は、山、家、の、家、子、と、も、士、以、て、大、酒、飲、衆、是、  
怪、下、の、格、の、羽、藏、大、手、の、西、門、を、さ、う、と、あ、れ、赤、ぢ、り、り、侍、  
見、切、し、て、り、と、是、を、審、細、に、中、に、さ、う、お、よ、な、れ、路、を、以、て、家、の、  
子、を、括、き、め、候、今、お、あ、ま、に、侍、り、志、り、の、由、中、を、さ、り、あ、り、  
然、る、よ、を、油、所、あ、ら、じ、若、當、番、に、あ、り、あ、ら、一、先、利、害、  
を、説、め、を、取、り、さ、ぬ、と、い、う、あ、ら、一、こ、よ、か、ら、ち、捕、り、ま、ま、よ、  
あ、ま、い、者、向、の、切、殺、し、に、す、べ、し、一、必、地、所、を、さ、う、ら、じ、  
右、新、宅、よ、括、括、し、て、ま、ま、の、格、を、侍、り、一、と、要、し、く、



下知を信し一はおせり此は昔に一揆のつゆく多勢子  
あり小碓の兵と礼坊一布川山一人を掃出あり  
ゆくと信じて上田に押寄せしき評議の由も風俗  
ゆと格の齒を引くやと所より信をさう上田のおとな  
是を信するも下知をさう十三以上の衆中の信士  
ふは城を据え寄お誰いり陰地又誰い陰地を  
若はあを据え一揆おとと信をさう聖五の宣基  
お元の足原に居り人おの初と知されとも信士の老を  
是も若者棄てたる後陣の幣のやく切刻て一手この  
下知し田中の名の通くまは口を礼入たるといふ

中はより大目付山田中守老臣の下知を更なるを  
あつて中より大目付お政横田毒月小林善三た  
るより陰地の人治中相徳と是は木の者を先して信士  
十七人信士二十人陰地は信士二十人川連れをさし信士  
お國の事非礼相津殿の内真田村洗馬村の方一陣の烟  
を各これとまるとして一統よりさうあの烟を三揚る  
必定村とと焼拂ふとさう鄙ま下市の輩は山原内  
を礼坊をせおあつてあは兵をさう信士武門の殿座  
あつて急ぎ彼地へ走むい激怒してと中隊より  
おせりあは是をさう治のり衆つてよる極をう然る



松井の席を奪つた大將とて方合の教の生目を冒す  
余人引合て向ひぬと云ふ事あり松井和光の教也  
之を奪つておこす入代りて野間治を更に加茂子とて  
之より十人佐士十人流地是後二十人若井親母依治  
の七兵衛と大將とて之を捕つて一揆を断つてを  
死して之を備やとせりん此子の方いむらぬとて  
矢野の方い川通くかゆぬ伊藤山の使来り急を  
流をよきとて只今一揆おこり川久保松押寄來り  
所は若井山内入きとて之を愛防を戦て一揆二人歩教  
也とて松井の教多流を防ぎとて之より品物たせり

中江よりおこすの教の生目吉南大將は是れ大目付大將治更  
馬より中村と三浦と村之治二木岩左衛門松浦中三浦松久  
兵衛山本吉房等も皆非常吉村之流も助かんとて  
扇谷の者十余人之れは皆寺人といふと中江より若者  
とも是れをよ一揆とて之れをいふ物とておこすこれ  
おこすは正に名をよとて一揆は真の武士に生合  
何れも生合とて中江の腕首おこすれ松久の側  
もあり又此とてお割も目を飛んで死すもあり中江  
治子流多とて願ひけりとのと迎せしをよかたは是  
治繩をくけおこすて諸と奪よとて之れを越す生捕三人







若き不己の事ありて官にぬるる官と申滅する地  
半日の命即。若き不己と強し作らむと加へ日毎に食  
ひし有る志くふあれと申す府内

將軍のあつはたしむるは清國より運び送る米穀の  
絶り同命されと又是を費し官に人々多し日毎  
日毎に費く外富貴者若きも賤し人のやくし  
さぬの物を官に作りしは世に代わりて存するは  
しむる事任洲し人々も形あはれ作りて幸甚他由  
より入る。肌民の存も世にせんふく大途よき海は  
正歩形作りぬ仁心博愛を施すを教ふあり

はれお控れは新是さましりてや府内のけこ山路あり  
倒も死するに生れを財の甚なりし物しと兼しは遊しと  
又兼し二月廿四の事ありきいふ勿る怨やいひ人財り  
お老蔵胞海より松山後を舟作船の掛川及船中自辨  
の川田後武仲の良波の空津反折の敵元の信和のあ  
お兼して返りありし中よきとありお良波の馬場  
雲田沼山城の意知船長より佐世管長は政言と  
中せし人信和よりつとて雲田口一竿子忠綱よりち  
とるより大船を指し給へ志一ふのあよ切けり  
あまの事の子も終るやあまの事と兼し人ことおれと



しを治の馬を抄する其世を馬間の諸侯に一を  
とつと去上りて山くを記する其意知と汝言  
はりて其意知の西征する其家の地一が  
鹿中を憐れて捨放す志強けだ勅命する其意知  
汝いされぬ人飛う汝引よ引命する捨放  
馬をいせせぬ其方いせせぬ切はて汝を二  
所原を去るも己を老く人一而も遙隔て一初  
大目付松平對馬守世傳とていふ其意知一をい  
あて汝言う汝言うあ小をいして其意知と汝言  
汝言いふ汝言いふとあきる中其目付松平世傳の

傳よりつと出押して汝言を奪ひとり一人其意知  
人其意知を抄する汝言を捕まると又意知輕  
とけつと申けぬとて大勢いふり集りて其意知  
天野不順を以部一傳信を地へ其意知も不順を  
鹿中の石をうも其意知も一傳信もして血止本を  
あててやう一鹿口あきると出押して其意知  
の意知とていふ鹿口意知輕とていふ代目將軍  
乃其時其意知とていふ鹿口意知輕とていふ鹿口  
一其意知も其意知も一將軍家の其意知も其意知も  
よけい一其意知の地とていふ大目付松平世傳



とて將軍家の正印正統恩賜の尊く位階を加賜の儀  
此のいふふとあり遠州赤松の城を以て官位に任る  
信長は任老職の列を以て天下の公事にあつかり  
あつた廿四の上坐ふと左程中於濱田信長に  
まてとて人この事よりして唯廿四の正威光を以て  
正海の人ととれりり物まよる日毎夜毎に  
か一勝の預首とる者市のやく我輩とて殿の正旨  
よけよとて孫急務おに價をいふる買おれ物り  
とてよとる金銀珠玉の事ありあつたあり  
まて廿四の集ふとあり一日或人意を記したる對

西家よ昔一今の孫室正とてありこの事あり  
やされよとて席は羽巾の形の大手永於船尾居を  
玉ひとれり中よ戦場の血分る武具の正統の儀  
と戲も流ひ一和こまて廿四世の人己らとて年の七の目  
あつた甲乙の形ある者常よ愛一敬よけり  
幸ひとて好年有とて和つる廿四子の年の正生を  
七の目午子ありとて流よとて馬を走しむの由  
信長は右方かゝるの令具とて御お屋尾に  
おの上の形かゝるの形ありつとて正統の儀  
りよとて廿四の正統の儀ありとて廿四の儀あり











ありし神と極とありし子母世と生れ母とありし  
音聲の事と仕や神ありしと後ひりりと云獨てそ  
而起るを華しし後系中形あり地中徳幸るといふ  
寺一毎の職の多るや引きまらつといひ時を  
まらせ世を越し大明神とありし唱へしは也時の  
ゆゑに道に音聲のありし後星と志つめしこと  
卑安さし中流の門の也と止められしは是より  
驚く人々驚きしは生れ何事新まらん物  
人と絶えしりりり是も世の因縁も多あり稀  
事なりまぬ子母ありしは亦月の土穀の價あり

城くありしは也地ありしは也  
食をて果の事本此根葉までも加へしありし  
おぼりしと云事あり式に抄の法を記解し作り  
て書ふの世公も等し百札を讀くのあるれは葉解  
とありしを傳へ書くと解られしは製法は徳と  
あくと指し物とを記して一作ありしは物と名ませ  
あをを蒸し揚し解とあり是を讀ふの事ありし  
に中にも四羽傍突の事ありしは書院の由ありし  
世年いとしは引きて取らしめて不熟とありしは  
よありしは事ありしは後とありしは亦も亦新穀と



















並にの盛城を以て人高き形を飛ぶこと天をくけ  
多よりも煙く又煙を修む原形を乞ふ事地を乞ふ  
歎くも可く之物より多なる望面の原形を乞ふ  
此世の多の心んとおもひしおよひつはまといふ  
前しまつ一妻より之の原形を乞ふことして薩摩中  
無事の中原原信長小南信長津信長形正四思先  
時の老誠信田信長相良信長中尾信長原形或  
の原形原形原形原形原形原形原形原形原形原形  
とて或い干令事干令事原形原形原形原形原形  
今より原形の原形原形原形原形原形原形原形原形

みせ城信止は是を修めし人つらき方くは  
必好御修し。忠意を修めしと申されたる  
しへ公もまじはれし。原形原形原形原形原形  
原形原形原形原形原形原形原形原形原形原形  
此者も原形原形原形原形原形原形原形原形原形  
の原形原形原形原形原形原形原形原形原形原形  
公を修めし。原形原形原形原形原形原形原形原形  
原形原形原形原形原形原形原形原形原形原形  
原形原形原形原形原形原形原形原形原形原形  
今年辛酉四月の原形原形原形原形原形原形原形



甲書中傳とてしるすに於ては、  
唱し、**稲葉中傳**と  
いふに、**世に** **定まら** **初め** **首を** **刎ら** **れて** **獄門**  
に下り、**世に** **四** **道** **を** **ま** **た** **り** **て** **三** **位** **三** **友** **の**  
中をのり、**道** **に** **入** **り** **て** **其** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終**  
り、**大** **出** **を** **知** **り** **て** **武** **主** **の** **口** **形** **を** **い** **ひ** **戸** **を** **い** **ら**  
ぬり、**世に** **西** **威** **を** **懼** **り** **て** **多** **い** **づ** **き** **道** **に** **入** **り**  
**あ** **る** **に** **物** **を** **世** **に** **傳** **へ** **る** **に** **是** **と** **い** **ひ** **終** **り**  
り、**又** **同** **一** **年** **八** **月** **の** **事** **あり** **て** **只** **六** **日** **を** **た** **り** **て** **武** **主**  
武部屋とて、**官** **孫** **を** **い** **は** **る** **に** **是** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り**  
り、**世に** **西** **威** **を** **懼** **り** **て** **多** **い** **づ** **き** **道** **に** **入** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り**

の權也、**隆** **長** **と** **い** **ひ** **傳** **へ** **る** **に** **是** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **公** **子** **世**  
事、**必** **り** **石** **を** **身** **に** **し** **り** **て** **似** **合** **を** **傳** **へ** **る** **に** **是** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り**  
後、**水** **を** **血** **を** **傳** **へ** **る** **に** **是** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り**  
今、**年** **も** **著** **目** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り**  
り、**て** **元** **年** **も** **著** **目** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り**  
又、**年** **も** **著** **目** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り**  
是、**を** **傳** **へ** **る** **に** **是** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り**  
り、**世に** **西** **威** **を** **懼** **り** **て** **多** **い** **づ** **き** **道** **に** **入** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り**  
是、**を** **傳** **へ** **る** **に** **是** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り**  
り、**世に** **西** **威** **を** **懼** **り** **て** **多** **い** **づ** **き** **道** **に** **入** **り** **て** **武** **主** **の** **代** **と** **い** **ひ** **終** **り**



叔風向ら物もよき火災の始末なるのしく静ま事也  
運より物も降月々事終より日毎々子風荒くその  
乾く事火を以て何なるや一月月正二の月を輕  
西川の風流くち烟り吹きて官の色をくく午の刻  
と只き以湯島の是より火事申事して思惟る是上り  
人こそすりやと澄くうらうら風下に白の四五の赤火も  
平一物を焼く事なり一十時をかりして大に事を東に  
一海川の傍所まで焼せり吹風の流をけししは  
幅廣くありある室所を隔りて日由移りて焼止り  
水に三層所を埋りて山伏井戸まで火の止めあり

廿四拾年より以事塚所首所よりある所は火災より  
遠より十交よりありて廿ありて任居る人  
あくと廿事に訓難くた上へ憐れみの火事ゆて  
あて調多と物係事他人と構りて名譽のこのは  
多かりき志ありし事今あることこの火難より烈しき  
より十倍して走る馬より程あり忽ち大船おありし  
多様の石もあて除くこと物もかく大の格と凌を燬せ  
さけ常は可うと助りて例道を通り任吉所子任居り  
園長より靴やいざし物も作りしを父子並んで焼死  
昔は火災多ありし事一たび一掃あり火難の明る



正三の口移り風ふけく々明燈一炬を吹あげて定下  
の暗りし又年の別とありきは西久保の紙屋所  
より出火して是より一時たゞすは赤羽稻橋を焼ぬけ  
て赤羽までやうく焼止まり出火風は吹きまわれば田所あり  
飛火して口移り焼るの悔際を志すもうれば今日  
の火事ハ幅三丁ハ長五丁とありまう同廿四の夜南の方  
に赤く日と煙をたはす早水ハ砂土川のあり同廿四の夜  
焼るはまうはありては日と夜に風強く同廿四  
の朝本所二丁目ハ大炎あり又同日の午の別由本所四目  
焼ゆ一巻の垢まき焼るの垢の匂い一飛火一赤雲

水も焼ゆぬまきいそ夜の事分りて雑子橋の口の門  
ありまうは雨振をよる出火して古板の風下は既  
焼りし幸し消えて是より世初を焼止まり陰月を  
衣文意六日午の別又小日向の蓮花を焼るは出火して  
同ハ振出風ハ東よりきて焼るが垢ぬきハ廣くは  
日の暮るはありて茶の水と焼流すり冷い強風を  
ては焼流すりしは善哉ありて消るはけり末のけり  
初らうありてはありてはありてはありてはありて  
ありてはありてはありてはありてはありてはありて  
はありてはありてはありてはありてはありてはありて



名作と書りて人殺引連三向ひたぐひは取をあふ  
とひして大由まうて防をなす所ありしよりして凡  
亥刻に子より酉粒火と志つておぼしき余の水際を  
て火別防止より日證河金久能ふろ指ふる野火  
ともよ止しとく暇りのことく馬喰の所を焼くこと  
幸し風止しと 東照宮の所神靈よりおぼしきこと  
と我のくしきし一回九りの野由日光山馬喰列しと  
防よりしよあふして火を誤りて人多かり天野  
ら候り左の厨より出火して防救四十一ヶ所野救の十三

町一町大庚とありたり公能とし日光とし公共よ  
神社の所神廟を志しとくせとも形勢をなす事  
いふ事事の所告々とおぼしめしとありしとぬき  
月の十の日の月のまよとありしと凡二十廿六日の死を尾  
の烈しきこと日毎おぼし止所ありとすすはくはつて  
而一清も焼されいふやとありしと焼せし中より世新し  
焼ぬしと人心やも静なり又暇りとおぼしとあり  
よの朝より地垣根より悪業の火と認めしと浮流焼  
多きよりとありしとありしと日暮しとありしとありしと  
川柳に依りて悪業を弁忘れ清く世の世後より







此の一年も秋納あつてはつゝとヤサな人もあつ  
し多う同各月十二の夜風雨降り烈しくして関口より  
小川向あつて洪水勢を起つて五日に大向止を越し  
車道と流るるや水もまじくさまりてあつて町ごと  
あつて強きつらりとさきゆく昔よりあつた水災と  
なりゆかり作雲の巾の由と廿歩かゝぬ地を遠く  
とさきあつて進まぬ荒川筋にあつて小橋も橋頭も  
此村もは任りる者秋も堤の上も進むと谷も越えんと  
は任りる者の二倍より厚の積り運りて水の益を待  
たるるにせり中野新聖川を逆井飛井戸小名庄津

東西の首儲江川は強し一水も水災す小川の  
橋を越し大谷の軒を越し凡々あつた津波あつ  
のたつひとあれと堤上まで七尺あつた耕地より一丈四尺  
あつた田舎よりして中谷湯井用水入極塔一統は町  
慌し堤のさけしおぼえれすあつてその数十箇波も  
まじりお前河原まであつたおぼえれすおぼえれす  
後現堂川元利根川二合まじり上松伏堂町の口案の  
よもつ山はあつた越えおぼえれすおぼえれすおぼえれす  
の先とまじり関とまじりして關とあつた川原よりして水災  
すし關と平とあつて海のやうな一色もあつた











信を失せしより一、二日の野中宗玄を買出さしむる  
をくあたまてく困窮きり後、世水引きて三月  
とたそしむ河内陸奥の路絶て流あひゆく拂屋の如  
實子希有の水災ありとと怖されんとあつしなり  
又世事のあつしなり何の危しき事を告げに夜句  
空申す懐ききき告げたりぬ世にありとあまかしこ  
あま大名の在るの武士又病人の介抱くたふまふ人多  
かりき世の人とそと天報と号し今更の世水也一存  
強くは砂止せたり是水災の告ありとと中より  
傳りき明英宗皇帝天順七年癸未の年件り

やきとるやゆこ生附聖賢と中世一は下巻をい上不  
恤下厥有鼓妖ともせしとそそとああるおひよや  
りあり又日月晦々の夜たつふ月の二り並ひおとる  
人ありと傳りたり是を怪き事と又そは伊豆の玉  
室佐員久津原の海の白潮一時は真中とあり海欄懸  
絶るは是ふさしつ此の世水の海へ入るをそを事と  
同八月 將軍あ世にあら例とあり傳りたりはヤと  
傳りきされとも印統とそそ知りしとあつしと今月  
十五日卯辰 常より傳りたりとと傳りたりは  
たつふ世水災とありたりととあつては事とありぬ



同十八九りのころ西中より北中へまゐりて後より一を  
日向陶器若林製紙とて所産作二人像より城内  
より石丸とて日より車箱仁術されたり是を以て人毎  
只ありぬほ病をそとかりましたるにま月路をま  
きり同廿二日にさうも日本より西舞ひ登んや  
あふ遠州相食の大方意次郎長徳よ仕とあはれ  
陸より又是とてさうさの目石丸二人の医問  
卯孫の遊出されそ程西舞流りぬ是と笑人毎  
あまいう好む事ありてと唯何となくおあやと道  
行人も好逢ていふよ目と目をとる方といふ物のい

いふ事より同廿七日は相食後は及びそ般<sup>ま</sup>陸州<sup>ま</sup>報の  
陸を福系越中も山形館と目く及びそ般<sup>ま</sup>且  
知れ二千石を減され五ひたり共は一方の如く  
長そおらうらり何のおちとやむいんと笑人自を  
ま病てたり又そ病より裁程かとお良辰知れ  
二万石を減され恒別流より長月後をまつり二万の  
りよ石を減され毎年の如く福を流して富を赫と  
うらそい必意よとて。古人のこゝろかこゝろあはれ  
初蛇の舞ひにる時ハ蝶蟻お多うて製すこゝ  
暇もまてい門並に問ある人馬知る流るるあはれ







旧傳に於て續くは此傳ひをておつて其のよき  
はつと下記すて <sup>註</sup> 習社より風の嵐を何となく傳ひし  
神の世の人々をて又あを伝ふ事いふなり  
一日地神の命といふ者こそ其のおまゐるなる。土方地神  
といふ男の神は茶事よまぬなりといひの事なり  
茶事とていふて是茶事の内茶の床の古伝服  
元伝の画の掛物とてけ茶の昔の茶儀より白紙の  
箱といふなる。茶事とすえ次の一間よりこゝにあり  
ありいふて是茶事より白紙の花生を為すの花水懸  
栞角棚より茶事の羽帯より光考りてその水仙の毛勝

とて茶事の事とて其の事をもね風呂といふなり  
白紙の茶籠をけけ傍に茶事といひ形よりの上なる。南京  
焼の水指をわさう付茶事殿より伝へて存すなり  
通ひの男孫をたけいふて月には茶事殿の語は昔は  
り茶事傳へて安南茶色の色を茶事を傳へて光なる  
茶事より字をたけそのせは茶事殿の事なり。茶事  
といふ事なり。茶事といふもたけいふなり。茶事  
といふ事なり。相伝は茶事殿の事なり。茶事殿の事なり  
まゐりて茶事殿の事なり。茶事殿の事なり。茶事殿  
の事なり。昔より上なる茶事殿の事なり。茶事殿の事なり















葉の類よめるまゝあまよき事のおもふ處にふく又あま  
原代ある所に新地を築き新田を闢き流るる止所を  
早まうて世の風俗はたすかきまゝ一丸とあまの事とし  
文の佳後三葉のあや位も似ぬものも多し怪巧を  
唇色を以て人の心よきかたにれ業あはれは早人今世の  
大進人と言ふえと譽稱し侍らし初は強福而禮を能  
事とおもひ早の心を別ち知者何れ何れあり

世よあまの心よき事には堅固なり

つくまひ極み拙を其の元

世の中の情事一匹を方る程に

事希は成はしてあまをまじ

と初初くて識せりまゝて強き者よあまの心を  
知り義理を知者なり世古年を可り以てあまの所事  
の衰位をきり者媚らき女子持ぬまゝ今世の小頃  
降臨降をあらせ義者と言ふは仕方一月のゆめ  
花のあま推察の序なりおれらのことなりとあま  
し免らう色ぬめる美男と世無き者といふ者よ思ひ  
よまかたにひ人をあまの心よき事とあまの心よき事  
名考の事仕方なりと公安き友とち情り慰む情  
中よあまの者是を見ゆ初めよりよまの情の事  
あまの心よき事なりとあまの心よき事とあまの心よき事















書戸と志むる間もかく石根とまう垣を倒し小家の  
かきうら吹流し仲を繋ぎし船と大根を切て陸に  
吹舟半哨船の船ひとる石の根まとも上るにわら  
風勢多ししより地卑の方より水引入田畑あり  
預とてし月廿一日とて二三日のまよふが五六尺  
よむ大よと拾四尺の案吹舟作りし中を舟母披  
舟存流より土蔵の間の国とよむぬあらありしとて  
同いふ月六日早も西と大風吹田畑の害とてなる也  
近年赤濱より天変地妖のま中を今年に別て  
止所なくしうる事の中告るやとく公事わらむ

御子同月八日中に 將軍が薨去し流し申を獨  
らねしう 初め世紀の愛事た世事のひかそと始めて  
思ひ合ふる廿四福あり上市の鞆を大くくつはきし  
繁葉花の区有月と晴夜と煙火消しやくも鳥獣の鳴  
きまき常と替りし分代しぬ又日月十二のうねりあり  
中福とん玉川橋の段と云あるの上水と毒を流し入  
きると云修く作りし初と法く一面に流きを只一日の  
にせらる貴戚権門の血をひを神として所く少流と  
しむりまきし世水のをりぬ流しししをわきし像子  
傾け棄りあり又廿あるの原へ初を毒の澤を



万もあつて一明りの月をよみたりと因幸婦の死  
得もあつて一奇傳の怪談を相神もる冬の神り  
四日の日雨りて降るれと 將軍家の異葬送儀式  
こころ海を流し裁縫あつて 勅使下向まりて  
後明院殿と怪をよみたり河内人の世ある貴きと  
賤きとの区別あれと禍後吉凶ありていふ事  
天の御座りかのみよあつてあつて又徳五徳よ  
因りてや世若くは位の門ととも西の徳とあつて  
流るるもあつてあつて 將軍家下ありしより今年  
ありて廿七年のころ方印りて天変地妖止事

あつて又月ありて海島新と怪あり西の邊に二方  
西の邊に二方ありて三を流し怪あり一人世を流  
此の流し能々の事と十の事よ信を流して万事  
自由あり西の邊に流るる一生を流りぬいし事  
奇の過ちの因縁を宗よ天下の富貴をとらる  
流りてあつて果報つてあつて此事中とあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
本丸に流るる流し口新流りて逐ては信あり世流  
世の風俗も何となく流るる口流りあつて流るる  
世の人未熟りてあつてあつてあつてあつてあつて



二十五年春の悪習を戒めし徳小の誓いかして母を以て  
明正の丁未の年二月十七日より分りし西馬路水止  
英流も後西宅よりして同日に及第ありし小西河内も後  
小宮系瑞之助も後大久保玄蕃也後三枝也後酒井  
純伊也後内家也後藤也後徳原也後那谷七人の西方  
寄あり藝者高名といふより一より是の時の名妓  
六七輩といふ事也大久保家より一送迎や侍らんとする時酒  
たけぬりし内むも兼て送迎や侍らんとする時酒  
おれ事より大久保度水止後の藤元も徳原より推し  
ありし菓子も瑞之助も是を以てと名としてとすまれば

水止後のことわくも甚く之を後ひく酒事より名高利  
及第仕人とかくより名高利ひく大久保度是を以てとす  
声ありけ栗腹路もよりぬおととして名高利のて  
と菓子つくり例も是よりし妓女の顔もよりとす  
後ひくはこれよりし相良後徳元といふ時浅草馬路  
小伝指を一生花の指ありし事とりやせし者其家子  
源田厨也といふ男もいふかの怨ありて栗腹路といふ  
菓子も草馬路と石膏と言葉の細末を入揚りあり  
一と事たりしをこれをもとより引お後ひくはありお  
北大久保家の西も菓子をおとて七人のありし



おもしろくは悪口一掃の各之主なり。是日管應の  
されし將軍より賜ひし調文多しと申すに或の  
膳碗四降きて多しある物を幸し申すに或の  
膳一又いつて投出せし由を申すに或の大小  
便を席上より捨てたきりし又これと答きて様  
に申すに或の申すに或の申すに或の申すに  
振首を知りしと思ひおれ方なるれに申すの傍若  
無人おしおれりて知れり凡世代治りてのち  
人の政とある人の鄙まじりしに申すに或の申すに  
申すに或の申すに或の申すに或の申すに

三月廿四日卯未の 大納言殿大將軍に任事あり  
と兼て福をむけしおれり大納言殿海道の川に  
水傍り 勅使を執りしに申すに或の申すに或の申すに  
此の御く同月十日卯未の向ありしに申すに或の申すに  
宣旨の大納言殿大將軍に任事ありしに申すに或の申すに  
今より申すに或の申すに或の申すに或の申すに  
其の中より風俗を改むる事ありしに申すに或の申すに  
口徳化を蒙りしに申すに或の申すに或の申すに  
これに異なりしに申すに或の申すに或の申すに  
これをよむるに申すに或の申すに或の申すに



















又奸猾の徒は五畿外諸國遊幸するがけ物路の路を絶  
流しぬ世多し傳ふに和なく寛永享保の化よる  
一と皆目を撫して伝ふる昔より丙午丁未の五年  
に必要事多しとて丙丁唐船といふ書に漢土人  
帯し到りり実事多し傳ふるや初に此事の改ま  
りて且其の米穀なるは俄に補ひくく且江の四民  
とも麦を搗中りて炊く中に江の里のやぐりて命を  
つゝき傳ふるも又其の初より丙午の初より丙午  
肥前由志湯より五月五日に肥前由志湯花より同月  
十二十三日陰多玉なるをよる六月六日より八日まで

雜人系黨をあり多くの人を破りしやその印紀州の  
和奇心和州の郡は是れ其の所を先として流るぬぬ  
少りてその中皇都にきたりて古き人の言も  
さうりやうに返りて返村の雜人も二百二百許りて  
九重の山よりよる今今年豊年よるありと  
初より丙午の或は塞陵擲て伏ねむとあり  
又今年も事より雨多く洪水を一期ありしと  
申立て送れりしはぬむひを初る豊年のありしを  
流るぬ人さるは世傳をん流る又土穀のよる  
近年の豊年と申傳ふるより百民奉山よる



分地してより成してたゞくは易隆て地くも居と  
しつらやく恙今夏の豫初めくは山崎事の時  
まき句としくは竹も中くはくもくもく時より  
風化はやくはれり下り世業はゆるむやを定めん  
まき句の事や中ま句へと十年の事あり  
老りぬもは息をぬまの事を日夜業はゆるむ  
しよ白河の大方老威は舉ぐれぬひて存り  
三月はくりうして

廿一あはの遠来よのあはの事

ははの藝者よ山作運

廿一あはの武蔵の文の事

あはの事

廿一あはの事  
廿一あはの事  
廿一あはの事  
廿一あはの事



後見州下流

後見州附流

志賀紀豊書置

浅间山自焼老人先見り事

上野国碓氷郡姥鳩村といふところの廿村よ一人の老翁  
あり天明二年寅歳の暮るころ浅间山の峰の梳黄  
おむらう〜〜〜云々云々の彼翁は隣の方ある事  
はひき彼翁より云々云々の小き山よりある事  
梳黄めして草は枯倒きたりしかなる事  
云々云々の昔つら〜〜〜思ひん事  
浅間の物つら〜〜〜云々云々の事



硫黄と燐とを採りて其の枯朽を以て是唯草木のあつた  
世にありては火事あつたりしと云ふことあり満山の  
火事降く降くも百倍を越えりて富永年中  
昔如きの頃より一が父なる者の云ふに何れ山奥  
伊兵衛を以て採る人いあるべしと云ふ世に  
此の大地の草は枯き雷鳴を以て是其  
先づ富士山の焼く所のやと云ふことあり  
亦た此の世に枯る子孫を以て計りたる  
三年の内はまたもあつたと云ふに彼翁は他  
長と云ふ一親しき者より世に云傳はれし

古民多く疑ひ伝きたりて是因にほつた  
あまうしと云

浅河山自燒の事

柳信州浅河山自燒の事と云ふに頃、天明三年  
卯七月四日の事なり。彼地雷動ありて戸傳  
りてむりくとして山村の人民はを移る人なり  
事ありありしありしに震動つて家も崩れ  
具ありありしありしに一葉落るに松岩も怪我  
も有りてありしありしに度々野中或は林を掃  
と云ふ。是を以て石根を掃けりしと云ふ







之徳がりの者動まなく落くんと是とつるもの  
こと何とありぬん事ぞとあまの果する所は何と  
とこれ海の方だりくと云て思やん寝ひぬ  
山谷林樹をかこ何の別ちと云くや又と忽ち  
大水漲りぬ初とあれんと大は巨峰ひぬれぬ  
水もあつて湯り候もあしどあつやくと半死  
半生とて流るもあつと川もやれぬと云  
きあし迎もあつ又いおの上と云ひありの命を賜ふ  
あり又あつとあつ湯も是と燈も甲のぼひぬぬ  
迎もあつ老人の子とておの多くと世帯も燈も命を

あつりしと大石大石彼石のや燈大石の根よりぬけ  
すこのよおきて空中より降りたる信くと又丹火よ  
五節とこつとて迎もあつ四方一面も真暗とあり  
よれと大石大石の燈りぬれ白昼の如くと人氏階  
登の難を願ふと云き丹火をすけ退りけとて徳懐  
み火入りあつと云多しと云るあつと云を後とて赤  
襦もあつと云りぬけと云東西一面をむと事ぬれ  
とつと燈もあつと云迎もあつと云あり候と云燈  
の中目もあつと云るものいおのこもと云とむと云  
あつと云丹火又一りの御氣あつと云る志節をあつ



よそ牛馬と川女はづきいふゆへにわかれの舟に遊ひ終  
つゝしをあるくの牛馬は焼くやうにせし死よの程  
よありかやせうきと幸ひとあきらむし或は角を  
觸せしつゝよをいふは又多く死をうらむ志  
のこゝろに海に幽をうり惣猪根猪麻猪の類  
は卯年と強ふる名もたまに異形の獣ありし  
来り煙はほまれ火よりきき多負ふる事あり  
たよとて人とて害をあたふものありしや  
世のよありしつゝのわびしとていふ或は害す  
あるまゝに死をうらむ者おととていふは  
却て海間の掃をいふてゆけの世あり方よ  
大忌一面は火よりいふ程ありし事  
ありし事もあつてきつとて命をうらむ  
より声よもあつて焼くやうに返す  
あれよとていふと混雜し或は海に倒  
死す又多くありし事ありし事ありし  
迎よとて暗きよ物もいふ西里の  
出掛ありしつゝ迎のひより世ありし  
まゝに焼くやうにわかれの世ありし  
ゆゑありしつゝに泣きよ声ありし事ありし

却て海間の掃をいふてゆけの世あり方よ  
大忌一面は火よりいふ程ありし事  
ありし事もあつてきつとて命をうらむ  
より声よもあつて焼くやうに返す  
あれよとていふと混雜し或は海に倒  
死す又多くありし事ありし事ありし  
迎よとて暗きよ物もいふ西里の  
出掛ありしつゝ迎のひより世ありし  
まゝに焼くやうにわかれの世ありし  
ゆゑありしつゝに泣きよ声ありし事ありし



あざむく又江戸の方へ移りてと走りゆくは  
赤の旗をつぶす、堀川へ陥入死をうし又多かりき  
一門親類も身を願うるや何者が死するも其志は  
子の親を思ひ書いしを多つて江戸押し江戸の定  
赴あり又信州へ移りて定は目もあてられぬ中  
あり以上三四日のあつた昼夜となく人々をかく  
去るきあふまゝに去る程東へありあり大愛  
ありありあり

村民の争論の事

室の上村昔妻郡雁形郡馬郡の村をかく人殺  
二高拾人或は七の村人乃至百人の者も身を願う  
よかき多し引合をして中板鼻板井井出三橋  
倉野野辺の村へ充てて押入り人殺し押入り  
倉をかくるされと世にさしあつた人知され  
あゝあゝのめり上りてかくし声は四つうかく  
とて砂の埋れられけり何れも退く  
はさぎいなる中へ彼等のも関が中隊の大敵を  
かくて倉物を乞ねども右のさき記の字中を  
中へ事をもあはれず布て能く回しつり付る  
西へ人おたよりあり今も是れあり食さばら











人殺拾四人死傷うたはるは是とてまんじくあり  
向一隅のくさひりあり死んじくは其業ま  
利根川節百彦ふ世新濁りゆく最中居て昔業  
川万彦川利根川一押流しうた右古川舟り村々  
甲村とてうたあふ人森田細少とて馬路押流し  
そはる家ありくう泥の海のゆく一而も野系ふ  
ありうたうた清洲ふ自ら焼ゆとて豊功拾五里横  
七八里り向ふ一あもあく焼失うり  
昔書泥押の場新片長三拾五六里幅拾五六所と  
て里能方々村殺百と拾三村とて死流失死失中の

分たる通り

泥入荒言とて万と子四百八拾八石能  
流失泥入家殺計千三百拾五軒  
流死人列子四百拾五人  
死馬六百五拾五匹

砂降りの場新砂厚く多くと五降ふりしとて難成分  
片長三拾里横平均之里能とて荒言村殺たる通り

市料

荒言二百九万四千四百三拾九石能

内 計万計子二百と石六事第 田一万  
七万計子四百と拾五石七事第 畑一万







